

1 書写とよい出会いを

「書写好き」に

広島県尾道市立向東小学校 教頭 藤井浩治



書写指導のエキスパートであり、
光村図書 小学校『書写』教科書の編集委員でもある藤井先生に、
六回にわたって連載していただきます。
第一回は、書写が好きになるような、
書写授業との出会わせ方のアイデアをご紹介します。

ふじいこうじ
藤井浩治
広島県生まれ。2008年度
まで広島県尾道市立土堂小
学校に勤務。陰山英男校長
在籍の3年間、教務主任と
して土堂改革に取り組み、
数々の成果を上げる。光村
図書 小学校・中学校『書写』
教科書編集委員を務める。

1 書写大好き

初めて漢字を学習する一年生は、わくわくどきどき、少し大人になったような気持ちで、小さな指でゆつくりとノートに書いています。早く誰かに見てもらいたくて目がきらきらしています。初めて毛筆書写を学習する三年生。新しい書写用具を机に並べながら、子どもたちみんなの顔には「早く書いてみたい」という気持ちがいっぱいに表れています。

しかし、さまざまな学校の研究会で児

童アンケートなどのデータを見ると、高学年になるにつれ「書写が好き」と答える子どもは少なくなっています。

小学校では、書写以外にもその子の人生にとって初めての出会いの場面がたくさんあります。私は「書写とよい出会いをさせたい」と、いつも心掛けて授業に臨んでいます。今回は「書写とよい出会い」をさせるためのアイデアについて、毛筆書写を中心にいくつか紹介します。

2 筆の持ち方と姿勢

わくわくしている子どもたちに、自由に体験させればよいというわけではありません。筆の持ち方と姿勢は書写学習の基礎・基本です。これを徹底できなければ、すぐに書写嫌いな子どもたちを作ってしまう。

(1) 筆を立てて持たせる「十円玉」

毛筆は硬筆と違って、穂先が柔らかいという性質があります。硬筆は軸を傾け

ても安定して書くことができますが、毛筆は軸を立て紙に対して垂直に穂先を下ろさないとうまく書くことができません。

そこで、「筆を立てて書きましょう」という指示をすると、子どもたちはみんな筆を立てることができますが、実際に書き始めると同時に筆は傾いてしまいきます。

これを解消するために、私は、初めて筆の持ち方を指導するときにちよつとしたパフォーマンスをしています。垂直に立てた筆の軸の上に「十円玉」を乗せて、子どもたちの前で筆を動かして見せるのです。子どもたちからは思わず歓声が上がります。そして、「筆は、このように十円玉を落とさないように書くよ。さあ、みんなできるかな。書いてみましょう」と指示を出します。

実際に十円玉を乗せて書かせるわけはありませんが、十円玉のイメージを頭に浮かばせることで、軸を立てることに意識を集中させます。机間指導をしながら「十円玉が落ちそう」と言うと、子どもたちは慌てて軸を立てるようになります。習慣になるまで徹底して指導していきます。

(2) 肩と同じくらい肘を高く

書写の姿勢の留意点はいくつかありますが、特に大事にしたいのが「肘」の高さです。毛筆書写は硬筆と違って大きな文字を書きます。肘が下がって脇が閉じてしまうと、腕を自由に動かすことができず、右下がりや極端に小さな文字になってしまうのです。

ここでもイメージが大切になってきます。子どもたちの前で、まず脇を閉じて筆を動かして見せ、次に肘を思いっきり高くして大きく筆を動かして見せます。「どちらのほうが、筆のびのびと動いているでしょう。そうです。肘を高く上げていくほうですね」と。

3 用具の扱い方

(1) 掲示の功罪

子どもたちが半紙に毛筆で書いた文字を、教室の後ろに一斉に掲示してある光景をよく見かけます。授業の評価として有効であるともいえますが、このことで書写嫌いな子どもたちを作ってしまうこともあるので、注意が必要です。

図画工作科で制作したものと違って、全く同じ文字が並びますから、誰が見ても一目で優劣が分かっています。書写の苦手な子どもたちは、自分の文字が下手であるということを実感して、劣等感が蓄積されてしまうのです。

掲示してある文字のうち、うまく書けていない文字を観察してみましょう。極端に「小さい」「細い」「かすれた」もの



肘の高さを意識して書いている様子。

に目が止まるはず。つまり、この三点に気をつけて指導をすれば、極端に劣って見える文字がなくなり、子どもたちの劣等感も軽減することができるということです。

実は、この三点については、用具の取り扱いに関係があります。筆の手入れが悪いと、根元が硬くなつて筆の穂が開かなくなるとともに、墨含みが悪くなります。すると、文字が細くなり、墨が不足してすぐにかすれますし、長い線を引くことができず文字が小さくなってしまふのです。

(2) 筆の手入れ

筆は根元に墨が残らないように、しっかりと洗わせるようにします。しかし、学校に洗う場所がなかったり、時間の制約があったりして十分に洗わせることが困難な場合がよくあります。

その場合には、下に雑巾を敷いた筆洗用のバケツを教室に用意して洗わせませす。または、授業前に水を入れた個別のペットボトルを用意させておいて、洗わせるようにします。十分ではありませんが、洗ってから筆を片づけるという習慣をつけることが大切です。そして、月に一回以上は、家で筆をしっかりと洗うこ

(4) 用具に関するその他の留意点

●書写バッグの置き場所、紙ばさみの置き場所を決めておく。

●余った反故紙をストックする箱を準備して、反故紙が不足する子どもに取るようにする。

●小筆は、根元をのりで固めた状態で使用するので、水で洗わない。墨の付いた穂先部分を拭き取るだけにする。

●ごみ箱や筆洗用バケツは、教師の見える場所に置く（捨て方や洗いが乱雑にならないように指導ができる）。

4 書写の準備体操

姿勢と執筆、用具の取り扱い方が定着したら、次は筆使いです。漢字は全て基本点画の組み合わせですから、「横画・縦画・折れ・左右の払い・点・曲がり・反り」などの基本点画は重要です。

三、四年生のうちに基本点画を書けるようにしておかなければ、本来の授業のねらいである「文字の組み立て方」や「点画の組み立て方」の学習に集中することができません。私は、基本点画の復習と習得をねらって、授業の初めに、自作の基本点画プリントを活用した「毛筆準備

とを宿題にして取り組ませます。これで「小さい」「細い」「かすれた」作品が姿を消し、稚拙な作品が目を引くこともなくなります。

(3) 用具の準備と片づけ

毛筆書写は用具の準備・後片づけに時間がかかるので、学習時間を十分保障できなかったり、書写を億劫に思ってしまう子どもを作ったりしてしまいます。できるだけ準備や片づけをパターン化し、手順を写真にして「見える化」を図り、定着させることが大切です。

【準備の一例】

- ①書写係が筆洗用のバケツに水をくみ、雑巾を敷いて準備する。
- ②机の上に、下敷き、すずり、筆、鉛筆等を準備し、本時に使用する枚数の半紙を机の中に入れる。
- ③バケツの水で筆を軽く湿らせると、硬くなった筆がなじんで書きやすくなる。
- ④紙ばさみ（下図）を机の横に掛ける。

【片づけの一例】

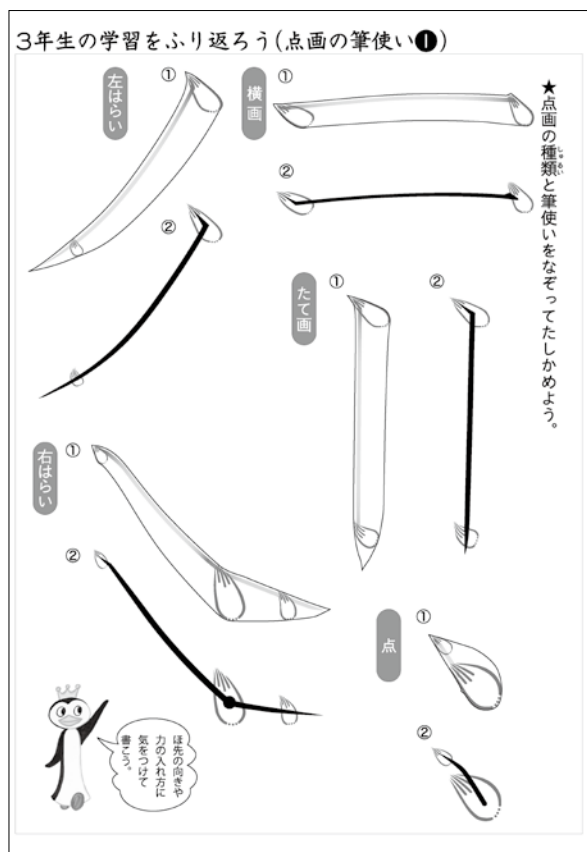
- ①すずりに残った墨を大筆に付けて反故紙（練習し終わった半紙）で拭う。
- ②反故紙をたたんで、すずりの墨を拭き取る。
- ③反故紙を一枚持つて筆洗用のバケツの場所に行き、大筆の穂を水の中ですぐ。水を滴らせないように反故紙で拭う。
- ④拭った反故紙で小筆の穂先の墨を拭き取る（小筆は水で洗わない）。
- ⑤大筆と小筆を筆巻きに収める。
- ⑥書写バッグに用具を入れる。
- ⑦書写係がバケツの水を捨て、雑巾で床を拭く。

体操」をしています。「学習指導書」付録DVDに収録されているワークシート（左図）を活用することもできます。繰り返すことで、始筆の角度や穂先の通り道などが、自然に意識できるようになります。

5 終わりに

書写とよい出会いをさせ、その意欲を継続させていくためには、基礎・基本を

徹底していくことが大切です。筆の持ち方・姿勢・用具の手入れや準備、片づけ・基本点画の筆使い等、今回取り上げた内容は、全て書写学習の基礎・基本です。学習指導要領においても「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力の育成」「学習意欲の向上・学習習慣の確立」の重要性が挙げられています。基礎・基本の知識・技能を身につけることで、子どもたちの書写に対する劣等感を取り除き、自信をもって学習に臨ませることができると考えています。



「学習指導書」付録DVDに収録されているワークシート。



『書写』教科書3年P3より。